



目ごろの近所付き合いが身を守る！ 育てよう地域の力「自主防災組織」

相互の連絡と調整をするために発足！

毛呂山町自主防災組織連絡協議会

自主防災組織は、平成7年に発生した阪神淡路大震災以降に全国的に組織化が進みました。また、平成23年に発生した東日本大震災の際にも、その活動により、多くの人命が救われたといえます。現在、毛呂山町においては38行政区で28組織が結成されています。

大規模災害が発生した時にひとりでも多くの人命を救うためには、地域の人たちの協力、いわゆる「共助」の力が不可欠です。地域の人たちが助け合って災害などに対処するためには発足したのが、自主防災組織であるといえます。

しかしこれまでは、各組織ごとに防災訓練や救命講習の受講などが行われていました。しかし今後、より大きな災害を想定した場合、各組織を横断的に繋ぐことが必要とされます。そのため、各組織相互の連絡を密にし、これまで以上に体制の充実や強化を図ることを目的とした「毛呂山町自主防災組織連絡協議会」が発足する運びとなりました。

少子高齢化が進むのと同時

に、自治会へ加入しない人が増えているなか、各組織ともその活動に苦慮していますが、反面工夫を凝らして活動している組織もあります。

平成26年4月からこのコーナーでは、先進的な活動をしている組織や工夫をして活動をしている組織を紹介していきます。他の組織の活動を皆さんの自主防災組織の活動に取り入れていただければと考えています。また、まだ発足していない自治会での自主防災組織結成の参考に、ぜひご覧ください。



自主防災組織連絡協議会発足式の様子(平成26年1月19日)

毛呂山歴史散歩 文化財シリーズ240 越辺川と古墳文化

越生町の山間部に源を発する越辺川。その越辺川に育まれた原始古代の歴史を振り返ると、地域性が色濃く映し出されていることがわかります。

狩猟採集が中心だったとされる縄文文化は、越生、毛呂山、鳩山の各町と坂戸市の台地から丘陵部にかけて広く見られました。毛呂山町では、大谷木川と越辺川の合流点付近の台地の先端で発見された白綾遺跡(前久保)や越辺川を南に臨む河岸段丘に広がる松の外遺跡(西戸)がその代表といえます。

ところが弥生時代になると毛呂山町域に限らず、越辺川の上流から中流域では生活の痕跡がほとんど見当たらなくなり、坂戸市の入西地区に僅かな集落が形成されるにとどまります。

再び生活の跡が発見されるのは、古墳時代に入ってからになります。当初、地域の有力者は弥生時代から続く方形周溝墓に埋葬されていました。古墳文化の象徴ともいえる古墳づくりは、

5世紀の終わりごろ、坂戸市の北峰地区で始まります。

やがて6世紀後半には、毛呂山町の大類地区でも埴輪を立てた古墳が盛んにつくられるようになります。大類古墳群と隣接する坂戸市塚原古墳群とを合わせた苦林古墳群には、5基の前方後円墳があり、行田市埼玉古墳群に次ぐ埼玉県内有数の密集度を誇っています。このことは、当地域に前方後円墳を築くだけの有力豪族が存在していたことと、豊かな経済基盤があったことを物語っています。

7世紀になっても大類地区よりさらに上流の川角古墳群、西戸古墳群で埴輪を立てない古墳が続けられます。昭和40年には、城西大学によって川角地区の吹上古墳の発掘調査が行われ、石室内から土器などの副葬品が多数発見されました。

毛呂山町の大類、川角、西戸地区は、現在でも多数の古墳が残されており、古墳群を散策しながら古墳文化を満喫できる貴重なエリアとなっています。



吹上古墳の副葬品
(城西大学提供)